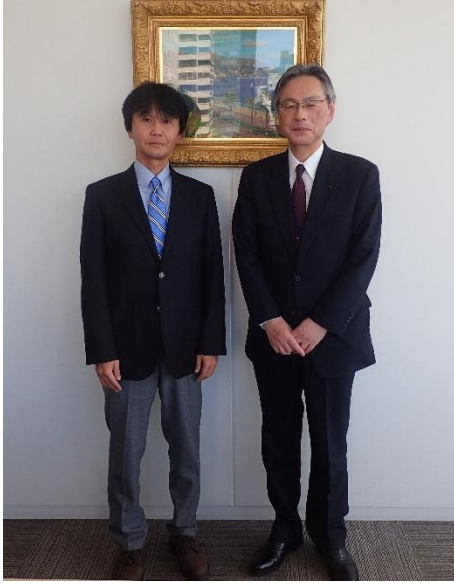


福島県東京事務所 伊藤所長が、本県を応援くださる企業の方々と対談する企画は第5回目を迎えました。今回のゲストは、三菱ケミカルホールディングスの岡田佳之さん。

特徴ある復興支援の取り組みを中心にお話を伺いました。



○写真左

株式会社三菱ケミカルホールディングス
総務・人事室
総務・人事グループマネジャー
岡田 佳之さん

○写真右

福島県東京事務所長
伊藤 直樹

■三菱ケミカルホールディングスのこれまでの福島県への主な支援内容(事業会社を除く)

- 福島県及びいわき市双方への義援金の拠出
- 従業員による募金活動
- 本社ビルにおける被災3県(岩手県、宮城県、福島県)の物産展開催
 - ・次世代育成を目的とする、被災3県の高校生を招いて行う高校生の商品の販売
 - ・地域産業の復興を目的とする、アンテナショップによる福島県名産品の販売
 - ・社員食堂における県産材を使ったご当地メニューの提供
 - ・観光PR
 - ・復興状況に関するパネル展示

伊藤: 三菱ケミカルホールディングスは、震災直後から義援金拠出、社員さんのボランティア活動への支援に取り組んでおりましたが、2013年から、被災3県の物産展を実施していただいています。これを始められたきっかけを教えてください。

岡田: 震災が発生した直後は、現地の生活基盤を早く整備していただきたいという思いで、NPO法人を通じて、また、直接、福島県及びいわき市双方に対して義援金を拠出させていただきました。

その後は、地域産業の復興という観点からも何か支援できないかと考え、アンテナショップの方々にお越しいただいて、地域産業の復興につながるよう福島県の名産品の販売イベントをスタートしました。

その後、当社の企業市民活動の目標の一つとして掲げる「次世代育成」の観点から、福島県の高校生の方々に当社までお越しいただき、高校で作っている自分たちの商品を実際に販売いただくイベントを始めました。当社の従業員にも、高校生の皆さんに積極的に話しかけていただくよう事前に案内していますので、高校生の皆さんには、社会人と触れ合いながら、自分たちの商品を販売する楽しさや大変さを学んでいただく一助となっているのではないかと思います。

物産展（令和元年2月）の様子



伊藤：福島県の場合は、2018年度から明成高校を、翌年度(令和2年2月)には、白河実業と、相馬農業高校を呼んでいただきました。

福島の子どもたちというと、ちょっと照れ屋で自分たちで直接売り込むことが少し苦手なのかな？という印象もあるのですが、子どもたちに対して気をつけられたことなどはありましたか。



岡田：自分たちの製造した商品を周囲の学生さんや保護者の皆さんに学校内で販売する機会があると高校生の皆さんから伺いましたが、当社内で販売する際は、初対面の、それも年齢層がバラバラな方を相手にすることになりますので、色々と気を使う場面が多かったと思いますが、実際にお客さんの反応を見て販売する機会は貴重だったとの声をいただいています。高校生の皆さんの様子ですが、緊張されるのは当然と思いますが、皆さん明るいなという印象を強く受けました。

休憩時間に高校生の皆さんから色々な話を伺いましたし、物産展の最後に代表の高校生から挨拶をいただいたのですが、「被災した時には小学生でした。来年おかげさまで就職です。」と元気よく言われたことから、今年は震災から9年目でしたけども、その歳月を我々が想像する以上の思いで過ごしてきたのは火を見るより明らかかなことで、よくぞ力強く、明るく育ってくれたなという思いをもちました。

伊藤：実際に買いに来てくださった社員の方の反応、反響はどうでしたか。

岡田：福島県の高校生の商品を販売する物産展は今年度で2回目ですが何を販売しているのかなと足を運ぶ人もいれば去年購入した商品を目当てにくるリピーターの方も多くいらっしゃいました。高校生の製造したものは少なくとも東京では購入する機会がないですし、アンテナショップにもなかなか行けないという方もいますので、当日は11時の開店前に従業員が列をなしていました。昼休みには従業員(当社の社長も列に並んでいました)で会場がごった返しておりまして、高校生の皆さんも驚かれていたようです。

先ほども申し上げた通り、復興支援や地域産業を盛り上げていこうということで始めたイベントですが、事務局として準備に携わっているチームメンバーの一体感の醸成にもつながっています。また、東京事務所の皆さんにもご協力いただいています。会場に福島県の復興状況が分かるパネルを展示しており、商品を購入しにきた従業員、当社そして福島県が思いを一つにする機会となる非常に良い取り組みだと思っています。



キャベツの甘さの可視化（左）、陳列の様子（右）

伊藤：ありがとうございます。

「支援、支援」だけでは長続きしないと、私たちも危機感を持っていて、今おっしゃっていただいたように取組みが定着して、県と色々な形で結びつきを持っていただいている、うれしく思います。

今回、子どもたちにとって良い経験だったと思いますが、実は先生からも感想をいただいておりますので紹介させていただきます。

まず、白河実業の赤城先生からは、「白河市内でいわゆる訪問販売は慣れているのですが、実際にマルシェで、来てもらって、そこで相対して売り買いすることについては不慣れで、そのためにいろいろ研修をやって準備を重ねてきた」そうです。

「そして、実際の場面で堂々と物を売ることができたことで子どもたちの自信につながったと思うし、成長したことを感じている」ということでした。

それから相馬農業高校の小椋先生からは、「自分たちがGAPを取得し、認証を受けた米やトマトなどが売れたのがうれしい。自分たちの取組みがパネルで見てもらえて、社員の皆様と触れ合うことができたうえ、福島の現状についても知ってもらえた。本当に良い機会をいただき、ありがとうございました」といったご感想をいただいておりますが、いかがでしょうか。

岡田：うれしいなと思います。物産展を開催するにあたっては、先生方におかれましては、当社と高校生の皆さんの間でいろいろなサポート



パネル展示

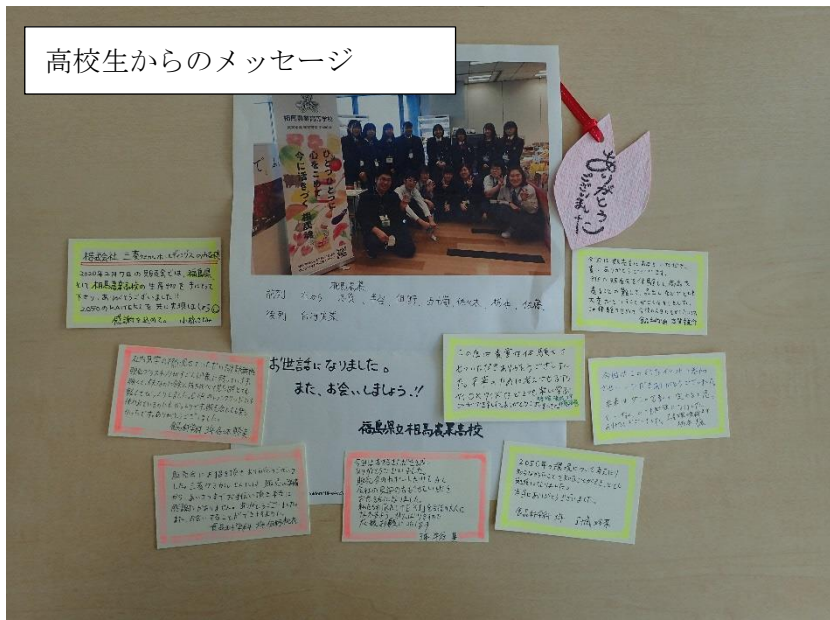
をいただきました。

物産展が終わった後に先生や高校生の皆さんからお礼のメッセージをいただきました。商品の仕入れ、レイアウトや社内周知、当日の運営サポート等、数多くの従業員が物産展に関わっておりますので、こういったフィードバックをいただくと、事務局一同、今後の活動の励みになります。

先ほど「支援、支援」だけでは続かないと仰っていた点について補足させていただきますと、今回、会場に展示したパネルを見ると、震災からの復興の様子に加え、福島県の魅力も存分に伝わってくるなと感じました。

私が小さい頃は、福島県の常磐ハワイアンセンターは憧れでした。(映画)フラガールを見て、ああ、ここからスタートしたのか、今ではスパリゾートハワイアンズとして、日本を代表する有数のリゾート地になりましたね。また、野口英世氏の記念館もあるし、小さいころに父親と一緒に登った磐梯山もあります。

日本酒めぐりや、さざえ堂、お寺などは大人にとっても、魅力的ですし、そうしたところをもっともっと発信できる場としても非常に良いのではないかなと思っています。



伊藤：いろいろと福島をPRしていただきまして、ありがとうございます。

では、参加された生徒さんの、その場での表情などで何か感じたことはございますか。

田中：朝、午前11時ぐらいから夕方頃まで、ほぼ1日販売するのですが、最初は緊張しているんですね。相馬農業さん、白河実業さんと2校参加されていらっしゃるって、初対面の方もいらっしゃいますし、参加者の大半が女性の中に男子学生は2人だけだったんです。

最初は、恥ずかしそうにしてるところもありましたが、時間が経つにつれて声は大きくなるし、こちらから働きかけなくても試食を勧めたり、呼び込みもやって、コミュニケーションを従業員と積極的にかかわす様子を見て、頼もしいなと思いました。

わずか1日でこれだけ成長できるのですから、今後が非常に楽しみです。

岡田：確かにそうでしたね。始まった時の顔と終わった時の顔が全然違いました。

伊藤：そういったところが、先生方がおっしゃっていた、「成長を感じる、自信を持っていろいろやれた」という見方につながってくると思います。

少し視点を変えまして、物産展全体のことでおうかがいさせてください。今回、震災から9年が経過した中、三菱ケミカルホールディングスとしての、今回の物産展開催への思いなどをお聞かせください。

岡田：スタートは復興支援、そして次世代育成というところがありましたが、今では、すっかり社員の方が心待ちにするようなイベントになってきました。本当に従業員が一体となって盛り上げていくようなイベントにしていこうと関係者一同、一致団結して取り組んでおります。

物産展以外にも、その日のお昼はその日限定で福島県のご当地メニューを提供しており、今年は福島県産米と伊達鶏の卵を使った親子丼とこづゆでしたが、想定よりかなり早い時間に完売しました。



写真右から

マネジャー 田中 佑哉さん

マネジャー 戸上 敬愛さん

従業員の注目度が高く、このイベントを大切にしていきたい。福島県のためでもあり、我々従業員のためにやっていきたいという思いで今、取り組んでおります。

伊藤：先ほど「企業市民活動」という言葉が出ましたが、三菱ケミカルホールディングスさんの企業市民活動の基本的な考えについて教えてください。

戸上：当社グループ従業員の行動原則を定めた企業行動憲章、及び企業市民活動の方針を定めた「企業市民活動方針」に基づき、企業市民活動を行っています。

当社グループでは、事業活動を展開している国々や地域の文化や習慣に対して理解を深め、事業による社会貢献に加え、我々会社としても、良き企業市民として活動して社会や人々からの要請、期待に応える活動を実施しKAITEKIを実現したいと考えており、実行にあたっては、

「サステナビリティ(グリーン)、ヘルス、コンフォートの視点から各国・地域のグループの拠点を中心に実施すること」

「ステークホルダーの皆様とのコミュニケーションを通じ社会的ニーズを把握した上で実施すること」

「会社と従業員が一体となって活動し、従業員の積極的な参加を促進すること」

「会社として、従業員が行うボランティア活動を支援すること」

を軸としています。

また、活動にあたっては、「次世代育成」、「地域社会とのコミュニケーション」、「災害支援」、「国際社会への貢献」の4つの分野に注力しています。



この考え方に基づき、この物産展イベントについては「次世代育成」と「災害支援」を従業員と一緒に実施するところに重点を置いています。

岡田：今では、「地域社会とのコミュニケーション」も入ってきていますね。

戸上：そうですね、今ではこの3分野をカバーしております。

伊藤：ありがとうございます。



そういった企業市民活動の方針に基づき、福島への支援などに取り組まれておりましたが、社員の皆様の変化など感じているところはございますか。

岡田：お題目を会社が唱えて掲げても、なかなか行動や実践に結びつかないというのが実態だと思うのですが、物産展のほかにも、ボランティアの機会の提供なども行っています。そういったところに従業員の方々を巻き込んで、実際に理解して実践にまで結びつけていく取り組みをやっていきます。

その効果かわかりませんが、物産展でも去年より、お客も増えて、売り上げも上がっています。従業員の意識が高まってきており、買うだけでなく、パネルなどを見ながら、高校生に話しかけるといった場面も見かけることができました。一定の効果が出てるのではないかなと思っています。

伊藤：これからの展望をお話してください。

岡田：原点はやはり復興支援ということで、実際に我々も去年、現地にも足を運びまして、物産展に参加いただいた高校も訪問いたしました。震災から9年目で、交通網や公共施設はかなり復興が進んだと感じましたが、一方でまだ仮設住宅にお住まいの方もいらっしゃいますし、地域産業、特にお米などの農産物は、まだご苦労されている点が多いという印象を受けています。

震災から9年という月日が流れることで、風化していってしまうことが心配されますが、こうしたイベント等を通して現地の状況を振り返っていくことが大事だなと実感しています。

我々が行っていることは、復興支援という観点からは本当に小さなことだと思うのですが、ただ、その小さいことを積み重ねていくことによって、福島県の皆様に少しでも寄り添うことができれば幸いです。

従業員の中で、楽しみにしているという形に変わってきましたので、引き続き、このイベントを大切にいい形でますます盛り上げていきたいなと思っています。

伊藤：今、小さなこととおっしゃられましたが、私どもにとって本当にありがたい大きなイベントです。積み重ねて継続していきたい、社員の皆様方も楽しみにしていると、ありがたい言葉をいただきました。

最後になりますが、福島県に対して、メッセージをお願いします。

岡田：場所は離れていますが、こういったイベントを通じて、福島県が近くなったと個人的に感じています。復興支援ということもありますけれども、魅力ある県だと思っています。

先ほど申し上げた観光地ですとか、名産品として日本酒、果物、お菓子。温泉やお寺もたくさんあるし、ますます、福島県が盛り上がっていくということを非常に期待しています。





岡田 佳之さんプロフィール

1991年三菱樹脂(現三菱ケミカル)入社後、本社、事業所、グループ会社において、主として人事畑を歩き、2011年より約3年間、米国に駐在。帰任後は人材開発部にてダイバーシティー推進に従事後、2018年4月より現職、現在に至る。